

# 生態人類学会ニュースレター

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

1997年12月10日発行

## 報 告

### 漁民の居場所と農民の居場所：マダガスカルでのタイムアロケーション調査から

飯田 卓

京都大学大学院人間・環境学研究科

#### 1. はじめに

マダガスカル島の南西海岸部に、ヴェズと名乗る人々が居住している。ヴェズ (Vezo) とはもともと「(カヌーを) 漕げ」を意味する語である。その名のとおり、ヴェズの人々は、南アジアやオセアニアに共通するシングルアウトリガー式のカヌーを操り、海上運送や沿岸漁撈に携わっている。このように「海洋民」とでも呼べるような集団は、アフリカ地域には珍しい。むしろ、ヴェズの人々の文化は、インドネシア近辺の海洋文化と同起源だと言われている (Nishimura, 1984)。この説の妥当性はきわめて高い。マダガスカル人の形質にはモンゴロイド的要素が色濃く、マダガスカル語はインドネシア諸語と同じくオーストロネシア語族に分類されるからである。ヴェズの海洋文化は、アジアとアフリカの接点に生まれたものといえよう。

ところで、ヴェズの居住地域は降水量が少なく、年間500mm程度である。なぜ、このような乾燥地にかぎって海洋民が栄えるようになったのか。そもそも漁撈という生業は、蛋白質という重要な栄養源をもたらすものの、毎日の活動に必要な熱量をまかなうことができない。このため、乾燥地など農耕不適地においては、漁撈だけを主生業とするのは困難なはずなのである。これが可能となった背景には、農耕民との交換関係や貨幣経済の発達など、農作物を安定して入手するための社会経済的条件が整っていたことがある。つまり、乾燥地に住む漁撈民は、社会経済的条件の変化に応じて生活戦略を調整しながら生きのびてきた。

このようなことを念頭に置きつつ、私は、ヴェズ漁民の生活戦略がどのようなものでどのように変化してきた

かを解明しようとしてきた。そのための手段として、漁村と農村を比較することは重要である。この小論では、「1日のうちどれくらいの割合をどこで過ごしているか」、すなわち主要な活動場所について漁村と農村の比較をおこなう。このことを通して両者の活動パターンの違いを明らかにし、最後に、ヴェズ漁村に見られる「漁民性」について私の考えを述べてみたい。

#### 2. 調査の概要

調査をおこなったのは、マダガスカル島の南西海岸沿いにある二つの村、漁村アンパシラヴァ村と農村アンキリマリニカ村である。両者は互いに4kmほど離れている。雨季と乾季それぞれにおける活動場所を比較するため、13日の調査期間を二つの村で二回ずつ設けた。雨季の調査は1996年1月2日～14日(農村)と15日～27日(漁村)、乾季の調査は8月1日～13日(漁村)と16日～28日(農村)であった。

観察対象は、二つの村のいずれかに居住するすべての成年男女とした。紙幅の関係上、ここでは既婚男子についてのみ分析する。漁村では32人、農村では30人が分析対象になった。女性に関しても同様の分析をおこない、男性と同様の傾向であることを確認した。

調査にあたっては、時間節約型スポットチェック法 (Suda, 1994) を用いた。調査期間中、毎日1回村を端から端まで歩き、集落内に見える人々の活動を記録し、見えない人々の行き先を近親の者に尋ねた。行き先を尋ねる際には、目的・出発日時・帰村日時なども可能な限り聞き込んだ。観察は、6時・7時・8時…17時・18時の13時点のうちのいずれかから開始した。観察開始時刻とする時点は、あらかじめダブらないようにランダムに選んでおき、観察予定に従って調査をおこなった。

#### 3. 集落で過ごす漁民と畑で過ごす農民

両村における既婚男性の活動場所の割合を集計すると、表1のようになった。漁村と農村のもっとも顕著な

表 1. 成年男性の活動場所の割合（単位：％）

	漁村		農村	
	雨季	乾季	雨季	乾季
集落内	62.3	53.4	24.4	25.6
畑（日帰りの農耕）	2.4	0.5	55.1	17.4
々（出作り小屋に起居して農耕）	0	0	0	22.6
海（日帰りの漁撈）	14.7	6.3	2.6	1.3
々（漁撈キャンプに起居して漁撈）	1.7	6.7	0	2.6
その他集落近辺（井戸など）	3.4	2.9	0.8	3.9
他村	15.6	30.3	17.2	26.7
合計	100	100	100	100

違いは、集落内で過ごす時間にあらわれている。漁村においては、雨季に 62.3%、乾季に 53.4%と、1 日の半分以上の活動が集落内でおこなわれているのがわかる。これに対して農村では、雨季に 24.4%、乾季に 25.6%と、集落で過ごす時間は 1 日の 4 分の 1 程度である。

では、農村の人々の主な活動場所はどこだろうか。それは畑である。雨季には 55.1%と、1 日の半分以上が畑で費やされている。調査地では、畑は集落からそれほど離れておらず、遠くても歩いて数十分である。それにも関わらず、出作り小屋を作って 1 日の大半をそこで過ごしているのである。実際に畑まで出向いて観察してみると、農作業だけでなく家事や道具製作や娯楽なども畑でおこなわれていた。つまり、農村においては畑が日常的な活動の場であり、集落は単に寝に帰る場所であるとさえ言える。このため、農村は比較的閑散としているのが普通である。これに対し、日常的な活動が集落でおこなわれる漁村は、比較的賑やかという印象が強い。

乾季になると、日帰りで農耕をする割合は農村でも 17.4%と激減する。その代わりに、出作り小屋で起居して農耕をする割合が 22.6%あった。両者を区別したのは、出作り小屋で起居していた場合、他の場所で活動している可能性を捨てきれないからである。しかしこの場合においても、ほとんどの活動は畑でおこなわれていると考えてよい。そこで両者を合計すると、畑で過ごす時間は依然トップである。雨季には畑まで通っていたのに、乾季になると畑に寝泊まりするわけだ。これには二つの理由がある。一つは収穫物の見張りに便利なため、もう一つは、雨季に多かった蚊が乾季にはいなくなって畑で過ごしやすくなるためである。

以上から、季節に関わらず、農村では畑で過ごす時間が多いといえる。これに対し、漁村では集落内で過ごす時間が多い。

#### 4. 日常的な活動の場を離れることが多い乾季

表からわかるもう一つの重要な点は、乾季になると他

村で過ごす割合が高くなっていることである。漁村では、雨季に 15.6%だったのが 30.3%になっており、農村では、雨季に 17.2%だったのが乾季に 26.7%になっている。漁村でこのような変化が見られるのは、乾季になると漁撈にとって気象条件がよくなり、泊まりがけの漁によって集中的に漁獲をあげようとする者が多いためである。農村の場合は、農作業が減って暇ができるためである。また、農村と漁村に共通の理由として、乾季には種々の祭儀が集中して催され、他村を訪れる機会が増えることがあげられる。このように、漁村でも農村でも、乾季になると雨季の日常的な活動場所を離れ、村の外に赴く傾向があるといえる。

しかし、長期にわたって村を離れるケースだけに着目すると、漁村と農村ではやや違った傾向があることがわかる。表 2 は、調査期間の半分以上の日数（13 日中 7 日以上）にわたって集落の自宅を留守にした人の数である。雨季には、長期で自宅を留守にする人は少数であった。乾季になると、漁村と農村の両方において長期不在者が増える。しかし農村の場合、長期不在者 10 人のうち 7 人は、畑の出作り小屋に起居していた。畑と集落が近接していることを考えれば、これらのケースでは、村を留守にしていたとはいいがたい。事実これらの人々は、気が向くと他の村人を訪ねに集落へ立ち寄り、ひととおり喋り終えるとまた畑へ帰っていく。つまり農村の人々は、長期間自宅を空けたとしても、広い意味で村の範囲内に寝泊まりしていることが多いのである。畑を中心にしたこのような生活からは、集落に対して「つかず離れず」といった態度をうかがうことができる。

漁村では、乾季になると好漁場を求めて積極的に村を離れる。とくに、遠隔地でテントを張りながら長期間おこなう漁撈においては、数ヶ月にわたって村を留守にすることがある。このように、村の範囲から完全に外れるような土地に長期間滞在することは、農村ではほとんど見られない。村を離れるときには思い切った遠出をする、というのが漁村の活動パターンの特徴であろう。この

表 2. 長期間（13 日中 7 日以上）集落に不在だった理由

	漁村	農村
(雨季)		
沖の島で漁撈（漁撈キャンプに起居）	1	0
他村の知人のもとに長期滞在	2	1
合計	3	1
(乾季)		
畑で農耕（出作り小屋に起居）	0	7
沖の島で漁撈（漁撈キャンプに起居）	3	0
遠隔地で長期間泊まり込みの漁撈	4	0
他村の知人のもとに長期滞在	1	2
行商のため他村へ	0	1
合計	8	10

ような活動パターンは、近年になって重要性を増してきている。遠隔地へ出漁して希少な水産資源を採取することが、ヴェズの生活において大きな現金収入をもたらすようになっているからである。とくに、東南アジア向けの大型ナマコの採取は、ヴェズの経済生活を大きく変えた。このような事実を、先に見た「漁村では集落内で過ごす時間が多い」という結果と考え合わせると、次のように言える。漁村では、集落の生活を基本としながら、遠出を 1 年の活動の中にもうまき取り入れ、メリハリのある暮らしを立てている。遠出を厭わない漁村の活動パターンが顕著になったのは、近年のことである。しかし、このことは、ヴェズが昔から持っていた「漁民性」を象徴的にあらわしていると私は考える。その理由は第

一に、土地に縛られた農耕民は遠出をしにくいからである。このことは、これまで述べた調査結果からもうかがえる。第二に、遠出の主な理由であるナマコ採取は、グローバル経済の浸透という社会経済的条件の変化への対処にほかならないからである。このようにオポチュニスト的な性格は、乾燥地の漁民に不可欠の条件だと最初に述べた。だが乾燥地にかぎらず、漁民がこのような性格を持つことは、人類史の上でかなり普遍的なものだったと私は思う。漁民は、農耕を捨てた時点で、必要な食糧を他者に依存するというリスクを多かれ少なかれ宿命づけられてきた。その代わり、生活戦略を調整することで社会経済的な変化に柔軟に対応し、危機を回避し続けてきたのである。

そのように考えれば、遠隔地での漁撈活動は、グローバル経済を背景に今後も活発に引き続けられるだろう。たとえナマコ資源が枯渇しても、その勢いは容易には衰えない。さまざまな危機に直面しつつも、海で生活する術を何とか切り開くのが漁民本来の姿だからである。

#### 引用文献

- Nishimura, A. 1984. Fishing in Indonesia from the marine ethnological viewpoint with respect to Wallace's line. In (Gunda, B. ed.) *The Fishing Culture of the World*. Akadémiai kiadó, Budapest. pp. 677-703.
- Suda, K. 1994. Methods and problems in time allocation studies. *Anthropological Science* 102 (1):13-22.

## ブタと一緒に飼われたヒツジ

菅 豊

北海道大学文学部

中国長江の南、浙江省嘉湖地方では、湖羊（英名:Hu Sheep）と呼ばれる品種のヒツジが飼育されている。嘉湖地方は、年平均気温約 18 度、熱暑時の最高気温は 40 度を超すこともあり、年間降水量は 1200~1500 ミリ、無霜期間は 270 日ほどと、高温多湿の自然環境にある。湖沼が多く分布し、それをつなぐように河川、クリークがめぐり、そこではイネ=コムギなどの二毛作を中心として、養魚、内水面漁撈、養蚕、小家畜飼育などが複合的に行われている。生業は高度に複雑な結合形態を持っており、その結果、土地利用が集約的になり、未利用荒

蕪地は 5 パーセントにも満たない。また、これらの生業は、生産物の売買を前提とした商業的性格を強く持っており、その性格は明代（14~17 世紀）には、すでに確立されていたといわれる。

このようなモンスーン気候下の集約的農業の卓越地域において、「牧畜的家畜」の代表ともいえるヒツジが飼育されていることは、奇異の目をもって見られるかもしれない。確かに中国華南の家畜飼育は、ブタやスイギュウなどの大型有蹄類や、ニワトリ、アヒル、ガチョウなどの家禽類の飼育が主体である。もちろん農耕用のウシは存在するが、それは畜力の利用に力点がかけられ、肉利用、乳利用は副次的なものであった。あくまで「非牧畜的家畜」が、この地域の家畜の特徴といえる。

そういった中でヒツジ飼育は、農耕社会における家畜飼育の特質を体現しており、その理解のための重要な

指標となってくれる。簡単にいうならば、この地域において本来「牧畜的家畜」であったヒツジが、「非牧畜的家畜」として飼育されているのであり、その家畜管理の論理には、この社会の論理が貫徹されていることが予想されるのである。湖羊は、通常ヒツジ飼養の行われる乾燥地帯とはかけ離れた環境で、長期にわたって特異的な方法で飼育されたことにより、一般的な牧畜地域で飼育されるヒツジとは、大きく異なった特異性を有するようになっている。

湖羊の特異性は、まず第一に、完全舎飼いという飼育形態にある。湖羊は、終生ほとんど、あるいは一步もヒツジ小屋（ブタと同じ家屋内で飼われている）から外に出ることはない。外に出るのは死んだ時か、売買、貸借、屠殺される時のいずれかである。それ以外の時は、できるだけ外に出さないよう積極的に閉じこめるのである。このような完全舎飼いは、通常のヒツジ牧畜観で考えるとかなり異様である。もちろん、冬場の厳寒期に限定的な個人舎飼いが行われる地域は、西アジアやヨーロッパにも存在するが、完全な舎飼いは伝統的ヒツジ飼育においてほとんど例を見ないであろう。湖羊を舎飼いすることは、当然、飼料を人間側が毎日欠かさず供給する、いわゆるフィーディングという飼育形態を前提としなければならない。このようなブタ同様の舎飼いの利点について人々は、1、余剰の土地が乏しいこの地方にあって利用空間が少なくすむ点、2、ヒツジ小屋には窓もなく、また各家ごとに隔離されているためハエやカの害虫や伝染性の病気を回避できる点、3、ヒツジの運動量を減らすことにより、餌の効率を高めることができる点、4、肥料用の糞尿を効率よく集められる点から説明する。

湖羊の特異性の第二点は、その利用にある。湖羊は、主として子ヒツジの皮革生産のために飼育されている。これとは対照的に、一般の牧畜社会で重要視される乳、羊毛は、ほとんど利用されない。湖羊の毛皮は商品価値が高いため“ルアンバオシ（軟宝石、柔らかい宝石）”とも称され、古くより珍重されてきた。フーヤンコウピ（湖羊羔皮）のブランドで知られる羊皮は、主として生後3日以内に屠殺した子ヒツジの皮であり、婦人服や帽子など服飾品の部分素材として用いられる。生後間もない屠殺とその皮の利用という観点からみれば、西アジアのパシュトゥン遊牧民などで飼育されているカラクール種のおス子ヒツジの利用と似ている。それは生後、ごく少数の種オス候補を除いてすぐに屠殺され、その皮はイスラム世界で珍重されるアストラカンの帽子の原料となり、高値で取り引きされる（松井, 1980: 53）。しかし、カラクール種の場合、あくまでオスを間引く群れ管理技術の一環として行われているのであって、そこで生産さ

れる子ヒツジの皮は副次的な生産物と見なした方がよい。一方、湖羊は群れの安定性など気にする必要は元々ないのであって、生後間もない屠殺は、それ自体主たる生産目的と結びついているのである。それは、何よりもオスに限らずメスも同様に屠殺することからも明らかである。ここには牧畜社会にみられるような、ハーディングと結びついたオス子ヒツジの選択的大量屠殺はなく、商品としての子ヒツジの皮を獲得するための、非選択的屠殺が存在するだけである。

湖羊の特異性の第三点は、早熟性、通年繁殖性、多胎性といった品種特性にある。そして、その品種特性は、商品としての子ヒツジを、とにかく多く生産するという商業的な目的に適合している点において特徴的である。

湖羊は確かに、一般のヒツジに比べ早く性成熟する。内モンゴル自治区に分布するモンゴルの遊牧民などでは通常、ヤギやヒツジはゾサグと呼ばれる数え3歳の春に出産し、それより早く出産するものは子嫌い現象を招くため問題視されている（小長谷, 1996: 45-46）。一方、湖羊はオス・メスともに生後4~5カ月で性成熟し、6カ月齢あたりから実際に繁殖に供される。家畜は古くより早熟の方向へ改良が進められてきたため、一般に在来種より家畜の改良種の方が早熟性は高まるが、この点から湖羊の改良の度合いが推し量られよう。ただここで重要なのは、早熟という品種特性とともに、その早熟性をネガティブなこととせず、むしろ早く子供を得ることができる利点と見なしていることである。

群れ飼育や、子ヒツジの長期育成を考えると、早熟性は問題になるかもしれない。だが、舎飼いで、かつ僅かな種オス・成メス候補以外の子ヒツジ育成をほとんど行わない湖羊飼育にあっては、いっこうに問題視されない。それどころか、商品として利益を生む子ヒツジを短いサイクルで確保させてくれる有利な特質となっているのである。湖羊飼育者が高収益を上げるための戦略に、早熟性という品種特性はまさに合致しているのである。

ただし、商品としての子ヒツジを回転よく生産するためには、この早熟性のみでは不十分である。これに、通年繁殖性という特性が加わって、それが初めて可能になる。一般のメスヒツジは通常、短日期に春機発動がおこる季節繁殖を行う。つまり、日照時間の消長がメスの発情期の出現とその長さに影響を与えるのであって、基本的に日が短くなった秋口から初冬にかけてしか、ヒツジのメスは発情しない。熱帯や低緯度地帯において、周年繁殖は確認されている（Hafez, 1970: 245）が、中緯度地域では通年で繁殖する品種はほとんどいない。しかし、湖羊のメスは妊娠さえしなければ、一年中約17日周期で発情する。この通年繁殖性によって、時には1年に2

表 1. 伝統的ヒツジ飼育における多胎率

対象	多胎率	出典
アフリカ諸牧畜民	14%	(Dahl & Hjort, 1976: 91)
中国/内モンゴル自治区	13%	(小長谷, 1996: 45)
中国/浙江省呉興県	82.65%*	(蔣・何, 1985: 16)
*二胎: 61.95%、三胎: 17.61%、四胎: 3.03%、五胎: 0.06%		

回、2年に3回という連産が可能となっている。

さて、品種特性として、残る一つが多胎性も見逃してはならない。ヒツジは品種によりその産子数にばらつきがあるが、伝統的牧畜社会あっては、多胎出産はそれほど多くはないようである。たとえば、アフリカ諸牧畜民の例によると、ヒツジの双子の出生率は約14パーセントほどにすぎない (Dahl & Hjort, 1976: 91)。また、モンゴル遊牧民においては約13パーセントであり、圧倒的に双子などの多胎出産が少ない。そればかりか、早熟性と同じく、双子出産が子嫌現象を起こす誘因となるとして歓迎されていない (小長谷, 1996: 45)。

一方、湖羊はといえば、1980年の呉興県のデータによると (表1)、その年に子ヒツジを産んだ成メス151,463頭の内、出産時1頭のみ産んだものは約17.35パーセントにすぎず、双子は約61.95パーセントにもものほり、さらに3つ子が約17.61パーセント、4つ子が約3.03パーセント、5つ子が約0.06パーセントと、双子以上の多胎出産が、全体の約82パーセントをも占めている。この数字は牧畜民のデータと比べ格段に高い値だといえよう。ヒツジは一般的に、一腹産子数が多いものは生産する純毛量が低い傾向にあり、また、発育も劣るため、群れ増殖以外の面では個体として必ずしも有利ではない。しかし、湖羊飼育においては、利用しない純毛の生産量を勘案する必要はなく、発育に関しても出生時とともに屠殺するため考慮する必要はなく、多胎性は商品としての子ヒツジの高生産へ純粋に寄与するのみであるといえる。

湖羊飼育が、商業経済と無縁ではあり得ないことは、収益が売買という商行為によって得られていることから明らかである。湖羊飼育の背景には商業システムが存在し、それとの関わりの中で湖羊の飼育技術は改良され、ヒツジ自体も改良されてきたと考えるべきである。

早熟性、通年繁殖性、多胎性といった湖羊の品種特性は、湖羊飼育が自給的な生業経済に位置づけられるのではなく、商業経済の中に高度に組み込まれてきたことを示しているのである。しかも、品種特性の改変は一朝一夕になされるものではなく、長期の継続的飼育によって初めてなされることからして、その商業経済の中に組み込まれた歴史はある程度長いタイムスパンをもって考えられるべきであろう。文字の国中国において、このヒツジについての文献記録が、12世紀中期以来残されている。それらを繙くと、湖羊という品種の成立が、この地の農業の商業化と軌を一にしていることは疑いない (詳しくは拙著「閉じこめられたヒツジたち」(『東京大学東洋文化研究所紀要』135)を参照あれ)。本来、山野を駆けめぐるヒツジを、ブタと同様の環境で飼育することに少々無理を感じるが、この嘉湖地方の人々にとっては社会環境、自然環境に適合した方法として受け止められ、かつ現実にこの方法で数百年もの長きにわたって湖羊飼育を持続してきた歴史的事実には注目せねばならない。

#### 引用文献

- G.Dahl & A.Hjort 1976. *Having Herds: Pastoral Herd Growth and Household Economy*, University of Stockholm.
- E.Hafez 1970. 「家畜家禽繁殖学」、養賢堂
- 蔣兆光・何錫昌 1985. 「湖羊」、農業出版社
- 小長谷有紀 1996. 「モンゴル草原の生活世界」、朝日新聞社
- 松井健 1980. 「パシュトゥン遊牧民の牧畜生活」『京都大学人文科学研究所調査報告』33、京都大学人文科学研究所

#### 変化し続けるジノ族の生産活動:

##### 中国、雲南省でのフィールド調査から

阿部 卓  
学術振興会特別研究員

調査で数ヵ月ばかり村に滞在し再び昆明クンミンに戻ってくる

と、何かしら町の雰囲気が変わっているのに気づく。久しぶりにパンを食べようと、昆明ホリアーイン 假日酒店ドンフォントントルへ行くことを思い立ち、昆明飯店の前の東風東路を渡ろうとすると、交差点にいつのまにか歩道橋ができています。以前は見知らぬ人の後にくっついて、川のように流れる自転車と自動車をよけながら路を渡っていたが、路を渡らずにこの歩道橋で越えろということらしい。自転車も通れる

ようにスロープがついている階段が四方に伸びており、昆明でもまだあまり見かけない信号機がぶら下がっている。ただし、信号機では物足りないのか、その下では台の上に立った公安が交通整理をしている。信号の色に合わせて車が流れていく日本で見慣れた光景が、ここではなんとなく不思議に感じられた。

調査地がある雲南省の南部、<sup>シーサンパンナ</sup>西双版纳州の首都景洪<sup>ジンホン</sup>でも、来るたびに、その変化に驚かされる。国をあげての観光開発により、以前は1日に2、3便しかなかった昆明からの飛行機は、1995年には8、9便に増え、外国からの団体旅行者が多かった乗客は、今では中国国内、香港、台湾からの観光客が大多数を占めるようになった。旅行会社も商店も、豪快にお金をおとすこれらの中国人を相手にし、バックパックの外国人旅行者には見向きもしなくなった。水牛が高床式住居の下で休み、夕方にはタイ族がテラスで水を浴びていた曼聽路<sup>マンテイルー</sup>は、夜中までカラオケが鳴り響く喧騒の場所と化し、路沿いには、ガラス張りが真新しい香港資本の高級ホテルが建てられた。路沿いのレストランでは観光客を引き付けるためにタイ族、ハニ族の民族衣装をきた女たちが並び、男たちが太鼓をたたき、どらを鳴らして観光客を迎え入れる。

景洪から小型のバスで3時間、乗り換えてさらに1時間ほどで、<sup>ジンシヤン</sup>基諾山というジノ族政府と市場のある町に着く。そこから山路を1時間半ほど歩いたところに、調査地であるジノ族の村がある。荷物の多いときは基諾山で、買い物にやってくる村人のトラクターを好物の冷粉<sup>リヤンフエン</sup>（緑豆の粉を蒸してコンニャクのように固めたものを適当に切り、トウガラシ、酢醤油等をかけたもの）を食べながら気長に待つことになる。

ジノ族はシナ=チベット語系チベット=ビルマ語族に属し、総人口およそ18,000人の大半が、基諾山を中心とした地域に居住している。1993年から1995年にかけて行なった調査の対象村落は、1966年に同じ村からの移住者によって開拓村としてつくられた村で、1994年末の人口は52世帯243人であった。村は景洪のように、観光化の波にさらされていないが、社会経済状況の変化は短い滞在のうちにも感じる事ができた。対象村の調査時（1994年）の生産活動は、焼畑による陸稲・トウモロコシ栽培、小規模の水稲耕作、茶と漢方薬材である砂仁<sup>シャーレン</sup>といった換金作物の栽培、ブタの飼育、狩猟・採集と一世帯が行う活動は多岐にわたっていた。これは他の民族との交流により、新たな生産活動や技術が加わることにより、生産活動は多様化・複雑化の道をたどって来たと考えられる。しかし、ジノ族に関する漢族の歴史的記述は非常に少なく、今世紀初頭以前の彼らの生業は明らかになっていない。ジノ族の解放以前の生産活動と、彼らの口承伝説をもとにした中国人研究者の調査結果で

は、彼らは北方から移住してきた集団で、基諾山周辺に定住した時点は母系社会を営み、主に狩猟・採集を行う集団であったとされている（杜玉亭1990）。その後、他の民族との接触により、焼畑による米の栽培、塩、針、器等の生活必需品と交換するための茶の栽培が始まり、また、ブタ、牛（アカウシ）、水牛といった家畜も外部からもたらされ、儀式的時や食糧として利用されるようになったとされている。1949年の中華人民共和国成立以降には、新たに水稲耕作の技術と、砂仁といった換金作物栽培が導入された。このように考えると、彼らの生産活動は、絶えず外部との接触により変化してきたと言える。今世紀に入り、彼らの生産活動は急激に変化したであろうことは間違いないが、これを近代化と称したとしても、絶えず起ってきた変化の中の、最近起きた一部分にすぎないように思える。

ジノ族の解放以降の急激な変化を考えた時、その中身は政府の政策等で半ば強制されて生じた変化と、それ以外の、外部の影響によるが、強制されているわけではない部分とに、その境界は明白なものではないが分けられる。他の集団と比べ中国の集団の特殊な点は、中央政府の政策の影響が大きいことである。例えば、母親の出産数は政府の人口政策により二人までに制限されると、子どもを二人産んだ母親は必ず不妊手術を受けるようになり、三人産もうという女性は一人としていなかった。このような強力な政策の影響により、母親の出産数は確実に減少し、同時に、人口増加率も減少した。生産活動に関しても、政府の政策の影響は大きく、解放直後は集団化政策によって生産の組織形態が変えられ、また、水田耕作、換金作物といった新たな技術や作物の導入も、この時期に政策として進められた。政府の生産活動に与える影響は、1980年代の計画経済からの脱却をめざした人民公社の解体により、その強制力は小さくなったと考えられる。1994年時点では、世帯の生産活動に関する意思決定は、世帯の選択にほぼまかされており、生産物の売買は比較的自由であった。ただし、人民公社時代のなごりである生産大隊という6カ村から形成されている単位があり、換金作物の種類や技術といった生産戦略に関することがらには、強制力はないにしても生産大隊の中で開会<sup>クイヘイ</sup>（話し合い）がもたれ、決定されていた。そのため、村落内の生産活動の世帯間格差は非常に小さく、すべての世帯が、ほぼ同じような作物の組み合わせを同じ技術を用いて作っていた。政府の政策の影響以外には、何が彼らの生産活動に変化をもたらしたかといえば、一言で言えば、「より発達したい」という欲求であろう。この発達という言葉<sup>フアータ</sup>を村人が口にするのをよく耳にしたが、テレビから多くの情報を得ている彼らには、否定的に捉えている部分もあるが、日本や欧米の生活が発達し

表 1. 世帯あたり収入の平均値 (n=52)

収入源	世帯あたり収入(元)	%
砂仁	2,548	52.5
米	486	10.0
竹の子	420	8.7
ブタ	347	7.1
茶	279	5.8
トウモロコシ	262	5.1
水牛	71	1.5
その他	439	9.1
合計	4,853	100.0

注: 1元=約12円(1994年)

たものと考えているようである。「何年か後には日本のように発達する。」といった言葉をよく聞いた。) 実際には、村人が何を発達の目安として考えているかは、収入とテレビやトラクターといった贅沢品の所有のようである。こうした原動力によって、現金収入のための活動が重視され、生産活動全体に占める収入にかかわる活動の割合は急激に増加した。現実には、現金収入は増えており、1979年のジノ族の1年あたりの世帯収入は50元と報告されているが、1994年の対象村落の調査結果はその100倍近い4,853元であった(平均世帯サイズは4.3人)。

1994年の対象村落の世帯あたりの年収の結果(表1)は、その半分以上が、1976年に栽培を開始した砂仁からのものであった。また、以前は収入源ではなかった米も、自分たちでは消費しきれない全収穫量の20%程度が売られるようになり、収入全体の10%を占めていた。トウモロコシの収穫の一部は、そのまま売られていたが、大部分はブタの飼料として使われ、トウモロコシや採集による植物によって育てられたブタは、新年や結婚式等でつぶされるもの以外は町で売られていた。このように、今まで行ってきた焼畑による米・トウモロコシ栽培を中心とし食糧生産を重視した生産活動は、新たに換金作物の栽培と竹の子のような換金可能な植物の採集が加わり、以前は食糧であった生産物も、自分たちが消

費できない部分は、換金に用いられるようになった。綿花の換金、大豆の栽培、牛の飼育といった活動は、最近では見られなくなったが、新たな活動が、以前行っていた活動に加わっていくため、労働投下は厳密に計ってはいないが、年々増加しているようである。米の収穫の後も、焼畑地の準備のほかに、砂仁、茶といった換金作物のための土地の整地があり、畑の草取りの時期には、竹の子採集、砂仁の収穫も行なうようになった。

以上のように、収入を増やそうと、新たな作物や技術が導入されるようになったが、最近では中国人が良く口にする「做生意(新たなアイデアで金もうけをすること)」という言葉が、村でも聞かれるようになったことである。つまり、今まで行っていた生産活動とは、まったく違った活動でお金を儲けようとするものである。例えば、トラクターを使って他の村へ行って米を買い、それを町で売って利ざやを稼いだり、トラクターで薪を運んでお金をもらったり、村で小売店を開いたりといった現金獲得活動が見られるようになった。私も持っていたボラロイドカメラを見た村人に、他の村に行って一緒に金もうけしようと誘われたことがある。こうして、トラクターを持っている男が畑を耕さなくなるなど、世帯間の生産活動の差異はしだいに大きくなりつつある。

1997年3月、二年ぶりに村を訪れた。建てかえられた新しい家が多いことに気がついた。初めて村を訪れた1993年には、茅ぶきで高床式のいわゆる伝統的な家屋は52戸中22戸あったが、多くの家が屋根に瓦を使った漢族風の家建てかえており、伝統的な家は、わずか4戸を残すのみになっていた。屋外に置いたテレビの前にみんなが集まって観るという光景も、新たにテレビを買った世帯が多いため見られなくなった。村から見える斜面のほとんどの木は切られ、ゴムとパッションフルーツが植えられていた。

#### 引用文献

杜玉亭 1990. 基諾族普米族社会歴史総合調査. 民族出版社

#### 通信

##### 第7回瀬戸内人類学研究会

日時: 1997年11月29~30日

場所: 兵庫県揖保郡御津町新舞子 美津和荘

11月29日

1. 開会の挨拶 伊谷純一郎
2. カメルーンのパカ・ピグミー紀行 寺嶋秀明
3. ある挫折した「村おこし」: アフリカの森からの報告 安溪遊地

4. 分配者としての所有者: 狩猟採集民アカにおける食物分配 北西功一

11月30日

5. 人類学における半自動翻訳の試み: 続報(1) 高崎浩幸
6. 「アフリカ人と自然のマルチメディア博物館」の進行状況 星野次郎

## 第3回生態人類学会学術大会のお知らせ

日 時： 1998年3月22日(木)～23日(金)  
 12:30から受け付け、13:30から研究大会開始  
 研究大会終了予定は23日12:30

場 所： 〒377-01 群馬県北群馬郡伊香保町 横手館  
 Tel:0279-72-3244, Fax:0279-72-2008

大会参加費： 有給者：18000円、学生：12000円  
 大会事務局： 東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室  
 Fax: 03-5684-2739  
 梅崎 昌裕 E-mail: ume@humeco.m.u-tokyo.ac.jp  
 中澤 港 E-mail: minato@humeco.m.u-tokyo.ac.jp

## 1. 参加・演題発表の申込

1人あたり持ち時間60分(発表30分討論30分)の予定で演題を募集します。発表を希望される方は、同封してある返信用葉書の演題発表希望の欄に、タイトルを記入してください。抄録の原稿提出方法などを連絡いたします。旅館を予約する都合上、参加・演題発表の申し込みは1月15日までをお願いします。

## 2. 交通

上野駅から新幹線を利用した場合は高崎で下車し(上野-高崎:55分)、在来線で渋川駅へ(25分)、そこからバスに乗り換え伊香保温泉までは約30分です。高崎駅からもバスが出ていますが、便が少ないために渋川まで出た方が無難です。また、上野から在来線を利用して渋川駅まで行く場合は、新特急水上3号があり、上野発10:00で渋川着が11:46になります。ただし、学会開催時期までにダイヤが改正される可能性がありますので時刻表などで事前に確かめてください。

## 編集後記

- 早くも生態人類学会研究会のお知らせを出す季節になりました。開催を予定しています伊香保温泉「横手館」は、過去に将棋の棋聖戦が行われたことがあるそうでいい宿のはずです。また、朝まで飲み部屋に割り当てられる人がいなくなるようにできればと考えています。皆様の出欠の返事をお待ちしています(大塚・梅崎)。

ニュースレター 1997年12月10日発行

編集：大塚柳太郎・梅崎昌裕

版下作成：大崎 雅一

印刷：土倉事務所

生態人類学会事務局

三田市弥生が丘6丁目 〒669-13

兵庫県立人と自然の博物館生態研究部内

TEL:0795-59-2016 FAX:0795-59-2015

osaki@nat-museum.sanda.hyogo.jp